

す。図書を借りる上では期間に関する規定が細かくあり、完全に開放している本に関しては学生が4週間、職員が16週間ということですが、短いものであれば2時間程度というものもあります。いかにもアメリカらしいと感じたのは、返却の遅滞に関する罰金制度があって一時間ごとの遅れにたいして1ドルごと罰金が加算されるシステムになっていることです。実際にこの罰金にかかって支払う学生や教官は少ないそうなのですが、それはこの罰金システムが与える心理的効果でしょうか。私自身が主に利用していたのはCommerce Libraryというところで、ここはいわばメイン図書館の一部局にあたる場所です。ここではおよそ6万冊の蔵書と1800冊もの雑誌を取り扱っています。これだけの蔵書数であるといかにも本を探すのに一苦労しそうですが、コンピュータによる検索システムが非常に充実しており、大まかな分野別の位置関係さえおぼえておけば簡単に目的の本を探すことができます。最近では検索ばかりではなく文書自体もコンピュータで利用可能なようにファイル化やCD-ROM化が進みつつあ

るようです。

以上長々と脈絡なく書いてきましたが、私の印象の中に残ったのはアメリカにおける洗練された図書の管理システムと、今後発展して行こうとする電子化の流れです。特に後者に関しては私自身その過渡기에遭遇した気がしてなりません。イリノイ大学ではインターネットによって資料を取り寄せるということはまだ出来ないらしいのですが、近い将来そうした可能性を十分秘めているような気がします。前者の図書管理システムがアメリカが長い経験を元に得た一つの財産であると同時に、後者の電子化、情報化もアメリカにおける知識の継承、共有という一つの大きな財産になるであろうことは想像に固くないのです。そうした意味で、アメリカの図書館の電子化の過渡期に遭遇できたことは私にとって貴重な体験でした。またアメリカへいく機会があれば、ぜひこの図書館の電子化の行方によってどのように図書館自体が変貌していくのか確認してみたいと考えています。

## 本学教官著作寄贈図書 (平成7年11月～平成8年4月末受付分)

寄贈者	書名	発行所	発行年	配架場所	請求記号
三浦 洋計 (訳) (寄贈時：教育学部教授、3月退官)	音楽分析入門	音楽之友社	1979	中央館開架・分館書庫	761/W36
柳 沢 良 明	ドイツ学校経営の研究	亜紀書房	1996	中央館開架・書庫	374/Y52